

数奇屋橋にて

娘が泣いている

焼けた石橋の傍で泣いている

背中で赤ん坊も泣いている

娘は乞食のようだ

乾いた髪 破れた服

赤ん坊はやせて裸

娘の胸はふくらみかけて

ふくらみ切れぬ青春がおののいている

娘の傍を車が駆けぬけ

ジャズが流れ ネオンがまたたく

人があふれ 衣服があふれ 光があふれる

真昼の太陽は力一杯輝くのに

何という暗い景色だ

真夏の雲は天までかけ昇っているのに

俺の心は 低くたれこめる

(一九五三・六)